

The background of the entire page is a soft, teal-colored landscape. It depicts a valley with mountains on either side, their peaks shrouded in mist. In the foreground, a calm body of water reflects the surrounding greenery and the hazy sky. The overall mood is serene and ethereal.

# 辰子伝説と北浦音頭

NPO法人 かじか瀬  
2015年8月23日(日)

■ 目次

■ 龍子伝説・・・・・・・・・・田沢湖と竜神  
(田澤鳩留尊佛菩薩縁起より)

■ 西木に伝わる盆踊り歌・・・・・・・・北浦音頭

■ 西木の名所  
(西木村郷土史 より)

■ 三湖伝説  
(wikipediaより)

■ 田沢湖讃  
(昭和43年発行「あきた」より)

■ 斎藤茂吉短歌  
(秋田郷土史物語(上)より)

■ 槎湖由来記

# 田沢湖と竜神

昔、今の秋田県仙北市田沢湖神代の神成沢という地に三之丞と呼ぶ家があった。

父親を早くに失い、母と2人で暮らしていたが、一人娘の辰子は近在には見ることでできないほどの希な美しい娘であった。

そのころ、このあたりの娘たちは、春になれば山菜を摘みにこだしを肩にかけて出かけるのだった（こだし・・・山菜を入れるかご）山にはゼンマイ、わらび、ふきのとう、タラの木の芽などがたくさんあって、体の芯まですがすがしくなるような食べ物があふれていた。

秋になれば娘たちがみんな揃って矢萩を刈り、夕暮れになると野菜をたくさんもらった馬が喜びひづめをならして家路につくのだった。辰子も胸を喜びにふくらませながら馬の背にまたがり、すすきの原の中を走らせるのだった。そんなときの辰子の姿は、たくましく美しさにあふれるのだった。

辰子は家のくらしを助けてよく働き、村の人たちとも仲良くすごしていたので、村の人々は自分たちの娘のようにいと

しがり、ほこりにも思っていた。

村の人たちは顔を合わせるによく語り合った。

「辰子ほどの美しい娘がこの世に今までいただろうか。」



しかし、辰子はそんなことは気にも止めなかった。美しいというところが、どういうことか考えてもみなかった。ただ生き生きと生きる喜びにあふれて、野や山にみんなと一緒に働き続けていた。

ある秋も深い日のことであった。

一日中、木の実を広いながら山を歩き回った辰子は、泉のそばに座って水を飲み、ほっと一息ついた。上気したほほは赤らんで、髪も乱れていた。辰子は泉をのぞきながら髪をくしでけづりはじめた。水を飲むとき広がった波紋はやがて静まり、水の面は静かに鏡のように澄んで辰子を映しだした。辰子はふと、くしを動かす手を止めた。

「まあ、なんてきれいな……」白い肌は泉の底から照り映り、なめらかに美しく、大きな瞳は、深い湖のように蒼味をおびて澄みとおっている。いきいきとした唇は、愛らしく、また気品に満ちていた。

「これが私？……私はこんなに美しかったのだろうか？」

辰子は眼をみはった。水鏡の辰子もみはった。そして辰子は呆然といつまでもいつまでも水鏡に映る自分の姿を見つめるのだった。



この日から辰子は変わった  
今まで心の動くままに野山を走りまわっていた辰子は、じつと物思いに沈むようになった。

やがて冬がおとずれ、雪が降り積もった。長い冬の間、いろいろのそばに座って、火を見つめながら辰子は考え続けていた。「やがて春が来る。そして夏がすぎ、秋がすぎで、また冬がめぐってくる……。こうしてだんだん年をとっていく美しい娘たちも腰のまがった年よりになっていくのだ……。」

辰子は両手で頬をおさえた。

「ああ、私にはがまんができない……。わたしもそうなるのだろうか？……この美しい私も？」

そう思うと、辰子の胸はしめつけられるように苦しく切なくなっていくのだった。

村の年よりたちが炉端えよって行くのでさえ、今の辰子にはみているのが苦しかった。

「私もああなるのだ。いつか私も……。」

そしてついには母の姿をさえ、未来の自分の姿かと思われ、美しければ美しいほど、人間に生まれたことすら呪わしくなり、考えれば考えるほど、眠れない夜が続くのであった。

暗の中をみつめて辰子の身はもたえるのであった。

「ああ、私だけは年をとりたくない。いつまでもいつまでも、この美しい姿でいたい……。と、夜をとおして思い続けるようになった。

ある真夜中のことであった。辰子はふいにむっくりと起きあ

がった。

「そうだ、神様にお願ひしてみよう。神様に一心こめてお願いしたら、この願ひがかなえてもらえるかもしれない。」

辰子はそのと家を抜け出した。まだ残雪があるので道は白く、月の光も身を刺すかと思われるほど冷たかった。しかし辰子は寒さも忘れ、真夜中の道を院内嶽へと歩き続けた。そこには大蔵山観音のお堂があった。

その夜から、辰子は雨の日も、風の日も、かかさずに真夜中の道を観音堂へと通ひ、一心に祈り続けた。若い娘の身でありながら、遠い山路を、しかも真夜中に通ひ続けることは並大抵のことではなかった。えたいの知れない獣の叫び声、メリメリと木の枝の折れる音、ぶきみなふくろうの鳴き声、ある時は全身を雨に打たれ、ある時は吹き巻く嵐に道を見失うなどし、それでも辰子はおそれなかった。やつれて見える頬はいよいよ美しさを増し、思いつめた黒い瞳は怪しいまでに輝きを増していくのだった。

こうして百日目の夜だった。

ぴつたりと堂の前に座り、一心に祈り続ける辰子は、日頃の疲れも手伝ってか、いつの間にか、夢とも、うつつともわからぬ境におちいつていた。そのとき辰子は、確かに観音様のお姿を見、そのお声を聞いた。

「辰子よ、かわいそうな辰子よ、よくぞ百日の間通い続けた。おまえがそれほど願うなら、この山を北へ北へとふみわけて行くがよい。そこには清らかな泉がわいているだろう。」

「……その水を飲めば、おまえは永劫の美しさを得ることができよう……。」

けれど辰子よ、その前にもう一度考えてみるがよい。おまえの願いは人間の身には許されない願いであるということ……。そのときになって悔やんでもおそいのだ。」

「いいえ、いいえ、この美しささえ保つことができますなら、どんなことでも悔いるようなことはありません。」辰子は自分の叫び声に、ハツとして我に返った。あたりは、しいんとしたただ青い月の光が、お堂の周りの木の間から洩れているだけであった。

「夢ではない。夢ではない。……たしかに観音様のお告げがあったのだ。」

北へ行って……泉の水を飲めと。」辰子の眼はきらきらと喜びに輝くのであった。

「辰子よ、その前にもう一度よく考えてみるがよい。おまえの願いは、人間の身には許されない願いだということを……。」辰子は観音様が最後にいわれたことを、繰り返して、繰り返して考えてみた。

そして静かに首を振った。たとえ、どんなことになっても私

は悔いはしない。……と。  
辰子は自分の心の動かないことを知った。



そして、何日かたったある日、近所の娘たち3人を誘い、山

菜を採りに行くといつてなにげなく家を出た。百日の間、夜ごとに願いをかけてかよった院内嶽への道を、今日こそ願いを叶えるためにいくのである。辰子の胸は喜びに燃えていたのである。

こうして辰子は、三人の娘たちと、わらびなどを折りながら院内嶽を越え、もや森をすぎ、

やがて高鉢やまの下をたどっていったが、目指す泉はどこにも見あたらなかった。

もう太陽も高くなり、疲れ切った辰子と三人の娘たちは草原に寝ころんで青い空を眺めていると、さわやかな風が吹きすぎ、娘たちは間もなく、ぐっすりねこんでしまった。

しかし辰子は眠れなかった。辰子はむっくり起きあがると足音を忍ばせながら、寝ている娘たちのそばを離れ、ただ一人で森の奥深く分け入って泉を探し求めるのであった。いくつもの森林の中を探し、とあるこんもりとした小森を横切ろうとしたとき、さらさらという流れの音を耳にした。辰子が近づいてみると、きれいな小川で、今までに見たこともないきれいな小川で、今までに見たこともない珍しい魚がいっぱい泳いでいた。辰子は白い手を延ばして、その数匹をすくい上げ、持って帰り、三人の娘たちと昼の食事に食べようとさっそく串に刺して焼きはじめたのである。

魚が焼けはじめると、その匂いはとてもおいしそうで、つ

い、こらえきれず一匹を食べてしまいました。その味のよいことはたとえようもなく、二匹、三匹。とうとう辰子は一人で全部食べてしまいました。

すると、急にのどが渇き、我慢できないほどになったのです。

辰子は、水を求め夢中で谷間を駆け下りたのである。のどの渇きはいっそう激しくなり、辰子はさらに深く谷間に下りていくと、真つ青な苔の生えた谷間からきらきらと光を含んでわき出ているものが目に映ったのである。

「あつ！泉だ！」

水は苔むした岩陰からこんこんと湧きだしているものであった。走りよった辰子は、白い手をさしのべて一口飲んだ。二口、三口と飲んだが、飲んでも飲んでも、のどの渇きは増すばかり、ついには何もかも忘れ、青い苔岩の上に腹ばいになって、丹い唇を泉につけてごくごくごく、と、心ゆくばかりに音さえたてて飲み続けたのである。

そして、どの位どの位飲み続けたのであろう。泉の水の美味さに酔うがごとくに泉も枯れよとばかりに飲み続けているうちに、どうしたことか、辰子は目がくらみ、気が遠くなり、体の中の血が逆流するかのよう異様な感じにおそわれると、みるみる辰子の美しい姿が、岩の上に腹ばいになったまま恐ろしい蛇体へと変わっていった。

すると、今まで麗らかだった春の日は一転にわかにかき曇り、



天地もさけるかのような稲妻、地鳴りや雷の音がとどろき、篠をつくような豪雨が降り出し、山は崩れ落ち、谷は裂け、山の形はみるまに変わっていくのであった。

こうして谷が埋もれて満々と水をたたえた湖水が現れ、世にもまれなほど美しかった辰子は蛇体となって、ついにこの湖の底に姿を消していったのである。

三人の娘たちがふと、目を覚ましてみると、辰子が見えないのに気がついた。

初めはその辺でわらびでも採っているのかと思っていたが、いくら呼んでも返事がないので、次第に不安になり、ついには小走りになり、声をからして辰子呼びながら森の奥へ、奥へとたどっていった。すると森の奥の方から、かすかに辰子の返事が聞こえてきた。

「あ！この森の奥だ！」娘たちは、ホッと胸をなで下ろしながら森の奥へやっついていくと、そこには見たこともない大きな湖が紺碧の水を満々とたたえていた。そして湖のほとりこけ岩の上に、恐ろしい龍の姿を見つけた。そして、かすかに返事をしているのは、恐ろしいその龍であった。

娘たちは気を失わんばかりに驚いて、後ろをみずに森をあおとして逃げ出した。

三人の娘は夢中だった。すべてはころび、転んでは飛び

起きて、転げるようにして山を下り、大声で叫びながら辰子の家にこのことを知らせた。

「なに？辰子が龍になっただと？そんなバカなことがあるものか……おまえ達気でも狂ったのではないか？」娘達の叫び声に集まった人々も、あきれて顔を見合わすばかりであった。

しかし、三人の娘達の真つ青な恐怖におののく顔や、不気味な山鳴りを聞くと、ただごとではないと思うようになった。

あまりの驚きに炉端に座ったまま身動きもせずに娘達の話聞いていた辰子の母は、いきなり立ち上がった。そして、いろりに燃えさかる榎を手にして半狂乱のようになって、「辰子、辰子」と、娘の名を呼びながら、夕闇の中を院内嶽目指して走り出した！

村の人たちも顔色を変えて後を追い、辰子の母を助けながら院内嶽に向かうのであった。

ようやく院内嶽を越えたか……見慣れた山の姿も、丘や林は跡形もなく、雷に打たれ崖は崩れ、ものすごさに不安が募ると共に、ただ胸を突かれるばかりだった……。驚きと恐れにおののきながら、かくがくする足を踏みしめ、さらに木立の中に分け入った

辰子の母と村人達は思わず息をのんだ。





黒雲の走る空からかすかに漏れる半月のうす明かりに、鉛色にぶく輝く、広い湖が満々と水をたたえているではないか！今までに誰も見たこともない大きな湖が！

「辰子よ！辰子よー！」辰子の母は湖に向かって気も狂わんばかりに叫び続けた。

水の面はしーんと静まりかえり、小波がさらさらと鋭く光るばかりであった。それでも辰子の母はひるまなかつた「辰子よ！辰子よー！」そのとき、湖の中にぼうつと淡い明かりが差したかと思える間に、ざばざばと水しぶきを上げ、銀色の

鱗をひらめかした龍が湖水の中から浮かび上がった。母の声に応じて現れた辰子の姿だったのだ。

辰子の母は、それを見ると、狂わんばかりにもだえ、身をよじり、「辰子よ、私の娘はそんな恐ろしい龍ではない。私の娘よ！美しい辰子よ！かわいい辰子よ！」とさらに叫び続け、「おまえのような龍など私の娘ではない！」と、あまりの腹だだしさに持っていたたいまつを龍に向かって投げつけると、不思議にもそのたいまつが湖面に落ちると、美しい魚となって泳いでいった。

母の声が聞こえたものとみえ、龍は静かに波間に姿を消したが、ふと気がつくとき、母のたっている波間近く、いつに変わらぬ輝くばかりに美しい辰子が現れた。

はっと驚いた母は、息をのんで見つめていたが、我に返ると、「辰子、早く家に帰ろう」と、いうと、辰子は静かに首を振った。そして、「お母さん、お許し下さい。私はもう人間ではありません。先ほどの龍こそ私の今の姿なのです。今までお話をしませんでした。私は永遠に美しさが変わらぬように観音様へ百日の願をかけたのです。その願いが叶って龍となり、この湖の主となって住むことになったのです。」そのことを聞くと辰子の母は声を上げて泣き崩れた。そして「辰

子よ、そのままですみんなと一緒に村へ帰ろう。母さんは、おまえが神龍だの、湖の主だのになるのは少しも嬉しくない、そのままの辰子でいて欲しいのだよ」辰子は悲しそうに母の言葉を聞いていたが、「お母さん、もう嘆くのはやめて下さい。

私までが悲しくなりますもの……私が先ほど見せたような姿になったので、さぞや悲しいことでしょうが、これは逃れられない宿命なのです。これまでかわいがってもらって何一つ孝行のできなかったことをどうぞお許し下さい。」

「辰子よ、そんなことを言わずに村の人たちと一緒にどうか家に帰って私のそばにいてくれ」お母さん、その言葉は辰子とても嬉しいのです。しかし、もうだめなのです。辰子はもう二度とお目にかかることはできません。

なにとぞお許し下さい。でも、せめて私の形見として、お母さんの大好きな生魚を四六時中絶やさぬように水屋に送ります。どうかその魚をみるたびに、辰子は湖の中で若く、美しく、幸せに暮らしていると思っして下さい」と、言い終わると、美しい辰子の姿はみるみる龍体と化して湖の底に消えていった。

「辰子よー！辰子よ！待ってくれ！辰子よー！」声を限りに母は悲痛な叫び声を上げて呼んだ……。しかし、あたりはひたひたという小波の音しか聞こえなかった。

辰子の母も、村人達も、ただうなだれるばかりであつ

た……。

辰子の母はじつとしてしばらく湖面から目を離さずにいたが、無性に腹立たしくなり、手にしていた燃え残りの木の尻を湖面に向かって投げつけたのであった。

すると、どうしたことであろう、不思議なことに、その木の尻はみるみる魚となり、尾を振りながら泳ぎ去っていった……。

泣き疲れた辰子の母は、村人達に抱えられ、ようやく家にたどり着いたが、その後辰子の言ったとおり、さんの城の家の流しの水槽には一年中を通して魚の絶えることがなかった。

かくして辰子を主としたこの湖は、美しかった辰子を想わせるように水は清らかに青く澄み、また湖畔には辰子の好きだった白百合の花が一面に咲くようになった。辰子の友達は毎年のごとく春ともなれば湖畔を訪れて、咲きにおう白百合の花をみては在りし日の辰子の姿を思い浮かべるのだった。

永劫の美しさを求めて発願し、大蔵観音によってその願いが叶えられ、神龍と化して湖の主となった辰子の物語は、この湖の続く限り、湖の美しさと共に世の人の心に残り、語り伝えられることでしょう。後の世までも……。



辰子の母があまりの悔しさと腹立たしさに手にしていた薪の木の尻(燃えさし)を湖面に投げつけたとき、不思議にもこれが一匹の魚となって泳ぎ去ったと言われたが、それが田沢湖特産、国鱒(くにます)で、別名を木の尻鱒と称するものです。

昭和の初めまでは田沢湖名産として珍重され、天然記念物にも指定されるなどして保護されていたが、1940年頃、大東亜戦中に東北電力会社の電源開発により玉川水系に生保内発電所が建設されるに及んで、玉川の毒水が田沢湖に流入、これを一大貯水池として同発電所の水源としたため、毒水のために湖の魚のほとんどが死滅の運命をたどらされた。また、木の尻鱒はその鱗片すらみられなくなりましたが、2010年に、富士五湖の一つ、西湖で生息していることが確認されました。

ウグイ、鯉は、年々、仙北市西木町の方々の放流事業のおかげで数が増加傾向にあります。

たつこ像は西木村の目玉的存在、1968年に潟尻に建立台座は二mのアフリカ産ブラックストン、像の作者は東京芸大教授舟越保武氏、青銅金粉漆塗仕上げ、高さ二・二m。

# 北浦音頭

西木村下檜木内地区盆踊り歌

作詞 上杉修二

一  
はあー

花の仙北 北浦育ち

吹くや春風 蕾も笑う

おばこ娘は その名も辰子

二

はあー

辰子笑えば 紅山桜

匂う黒髪 み山の緑

黒目がちにて あふるゝえくぼ

三

はあー

色香変わらぬ 十七・八で

花の盛りを 散らしてくれな

頼む神様 観音様よ

四

はあー

我も我もと いいよる男

夏の夜の虫 灯したい

飛んで来れども 柳に風よ

五

はあー

わが身ながらも ほればれ映し

水に映した 姿と形

あわれなるかや 蛇体と変わる

六

はあー

辰子かわいや 蛇体となりて

胸の炎も 千尋の底に

深く沈めた 辰子や悲し

七

はあー

もとの姿で 波かきわけて  
一目なりとも 相内潟の  
ここは御座石 岸までおいで

八

はあー

沖に立つ波 私の思い  
岸に立つ波 貴女の思い  
うわさ立つ波 女波と男波

九

はあー

深く沈むも 浮木の底に  
深く沈めた 変わらぬまこと  
契る千歳の 八郎さまよ

十

はあー

かたい潟尻 北浦娘  
親も白浜 あの砂枕  
辰子かわいや かわいや辰子



御座石神社

佐竹藩主二代鑑照義隆公が湖畔の上に休憩の御座所を設けたので、その地域を御座石と称し、祭神は伝説の龍湖姫命・水波能売神（水の神）を祀る。秋田県・田沢湖町・西木村其の他有志の協賛を得て、1963年春に完成。

伝説の潟頭、鏡石、雨乞石、又珍しい松桜塊など簇生している七種木もある。



「ミつうみの 夕べの水の落  
ちるなり 家七ツある湯じり  
のむら」小杉方庵の碑



榎木神社は湯尻明神・漢榎宮ともいい湯尻の鎮守、1969年に西木村観光協会の改築、宮は棟に千本ある白木の神明造り、太鼓橋（七m）を渡る古城の荘厳なお宮正面に益戸滄洲の漢榎宮の額がある。（益戸滄洲享保十一〜安永六年 佐竹の役人、又学者文人として有名「問嗟紀行」で湖を紹介される）



田沢湖抱返り県立公園（田沢湖高原も含む）は1960年4月1日に指定。

榎木明神 相内湯より湯尻よりの小杉沢の辺の湖畔に老杉、有料道路の上側に小祠がある。湖の水の増減の少ない発電開発前まで、湖畔の岸壁から離れた湖中に大きい古木が倒立していて、小波の時は神龍の蟠るが如くに見えていた人呼んでうきき明神と崇め祠を建立して祀られる。古くから田沢湖紀行には、榎木明神の不可思議な倒木のことと述べられている。

\*参考文献 田沢湖と西木（「西木村郷土史」より）

# 田沢湖地図





## 三湖伝説

### 十和田湖

鹿角郡の草木（くさぎ）村に八郎太郎という名の若者が暮らしていた。

八郎太郎は村の娘と旅の男との間の息子で、父親は寒風山で竜に姿を変えて消えたと言われており、母親は難産で死んでいた。それで祖父母に育てられ、マタギをして生活していた。しかしある日仲間の掟を破り、仲間の分のイワナまで自分一人で食べてしまったところ、急に喉が渴き始め、夜も川の水を飲み続け、いつしか竜へと変化していった。自分の身に起こった報いを知った八郎太郎は、十和田山頂に湖を作り、その主として住むようになった。この湖が十和田湖である。

### 八郎太郎と南祖坊の戦い（その一）

三戸郡の斗賀村（現・南部町）に南祖坊（なんそのぼう）という男が住んでいた。

南祖坊は諸国で修行をした後、熊野で「草鞋が切れた場所が終の棲家になる」との神託と鉄の草鞋を授かり、十和田湖で草鞋が切れたため、八郎太郎に戦いを挑んだ。南祖坊と八郎太郎は「日」晩戦った。南祖坊は勝者となって十和田神社に祀られることとなった。

八郎太郎は日本海附近まで来て、ようやく湖を作る適地が見つかった。その支障となる天瀬川（あませがわ）の老夫婦の家を訪ね、明朝鶏が鳴くと同時に洪水が来るから避難するようにと伝え、湖を作り始めた。しかし姥は逃げる途中で麻糸を忘れてきたことに気づき取りに戻った。そのとき、鶏が鳴き夫婦は逃げ遅れたため、八郎太郎はそれぞれ別々の岸へと放り投げて助けた。夫は湖の東岸に、妻は北西岸に祀られている。出来上がった湖が八郎潟である。

### 八郎太郎と南祖坊の戦い（その二）

八郎太郎は、いつしか辰子に惹かれ、田沢湖へ毎冬通うようになった。辰子もその想いを受け容れたが、ある冬、辰子の元に南祖坊が立っていた。辰子を巡って再度戦った結果、今度は八郎太郎が勝ちを収めた。それ以来八郎太郎は冬になる度、辰子と共に田沢湖に暮らすようになり、主が半年の間いなくなる八郎潟は年を追うごとに浅くなり、主の増えた田沢湖は逆に冬も凍ることなくますます深くなったのだという。

人間に姿を変えた八郎太郎の旅の途中、彼を泊めた旅籠では夜の間彼の部屋を見てはならないと言われ、覗き見た宿は必ず不幸に合うと言われていた。八郎潟が干拓された今では、八郎太郎は一年中田沢湖に住んでいると言われている。

# 田沢湖讃

◆——タツコ像によせて——

おとめ子は つれだちて行き 山に入りたり

雪消えの沢の菜(な)とりに

くれないの荅(つばみ)ふくらみ

照りかえすみどりの嫩葉(わかば)

ZAWA ZAWA ZAWA ZAWA

椿わら しばしよぎりて しばしよぎりて

おとめ子は 何を思い行かん ひとりはぐれし

沢暗きなおも奥処(おくど)に

山査子(さんざし)の白き花びら

瑠璃の声すでにたえたり

SO-SO-SO-SO-SO-SO-SO-SO

流れのみ 耳にしみいる 耳にしみいる

おとめ子は 齒朶(しだ)ふみしだき 伏しぬ澱みに

眉目(みめ)すずし顔に見惚(みほ)けて

真玉なす真白き面輪(おもわ)

水底にゆらぐくろ髪

DODO-DODO-DODO-DODO

山の音 とどろとどろに とどろとどろに

おとめ子は 入りて帰らず 沙汰のひろこり

夜にいりていよよ果てなし

物怪(もののけ)に揺らぐたいまつ

田鶴(たず)よ田鶴(たず)よいづくにありや

HO-E HO-E HO-E HO-E

母の呼ぶ 声もすべなし 声もすべなし

出羽(いでわ)の山 幾重のはてに 水たたえたり

霧森(もやもり)山もやにかすみ

めくるめく春のひと日を

おとめ子は沐浴(ゆあみ)すという

HITA HITTA HITTA HITTA

音のみぞ うつつにきこゆ 白日のゆめ

ここに揚げた「田沢湖讚」は、湖畔瀧尻に1969年に建てられたタツコ像によせ、かつて『田沢湖』の編著のある角館町立農村モデル図書館長富木友治氏が書かれたものである。この歌は県出身作曲家小野崎孝輔氏によって作曲され、五月十二日の除幕式のさい地元高校女声合唱団により献ぜられた。富木氏は五月二十四日に享年五十二歳で急逝、文芸および民俗研究の分野で、今後の活躍に期待するものが大きかっただけに惜しまれている。碑は九四cm×一六二cm×六十七cm、田沢湖讚四番が刻されている。舞踏があり西中に伝承されている。



富木友治

1916-1968 昭和時代の民俗研究家。

大正5年2月6日生まれ。柳田国男にまなび、昭和14年郷里の秋田県角館(かくのだて)にかえる。北方文化連盟を結成し、樺(かば)細工の技術保存に尽力。戦後は農村モデル角館



図書館長となり、自動車文庫をはじめた。昭和43年5月24日死去。52歳。日大中退。著作に「椽(とち)の木の話」など。

山々は 細部に没して 今日一日

梅雨の降らぬ 田沢湖に居り

田沢湖に われは来たりて 昼の飯

食みたりしかば このふと蕨

うつせみは 願いをもてば あわれなりけり

田沢の湖に 伝説ひとつ

とどろきて みず湧きいでし時という

ひとり来たりて 乙女竜となる

斎藤茂吉 昭和二十二年 6月18日

# 槎湖由来記 「龍子姫の歌」

白百合 作

1

夜の幕の深々と、静かにふけゆく湖面に  
千古の秘密黙しつ、水に音なく山眠る  
三更過る空を西、雲間を洩るる新月の  
流るる光影淡き、汀に一人佇むは  
人かあらぬかはた神か、恨み悩める顔あげて  
またたく星を仰ぎては、またうつむきつ抱く胸  
遠きその世の追憶に、狭霧の如く浮かびくる  
悲しき罪のその夢に、むせぶは波か松風か

2

ああこの悩みこの悶え、解くべき鍵やあらざるか  
槿花一朝の誇りより、尚短きは人の身ぞ  
仇し嵐に散る夜半の、唯一睡の夢ぞかし  
されども花には春来たり、欠くれと月の満つものを  
人には再び春ぞこじ、げに果かなきは人の世ぞ  
月に比すべき顔も、花にたとうる唇も  
遂に朽つべき命なり、我身の末もかくならん  
噫永久に散りもせず、朽ちぬ花にぞ咲き出でん

3

星影もなき烏羽玉の、何に驚けん闇の鳥  
鳴く音を忍び夜な夜なの、誓いもかたき石階の  
變わらぬ姿百歳や、千歳経ぬらん杉木立  
神さびませる御社を、唯一筋に念じつつ  
み前に祈る佳人あり、はや満願の丑の刻  
梢の嵐も音絶えて、夢か現か幻か  
社の内に聲ありて、汝の願い叶うべし  
常世變わらぬ身となさん、疑う勿れ夢々も

4

峰の残雪とりどりに、若草萌ゆる春景色  
伊達な手拭翻ら翻らと、緋の前掛打ちそろい  
北浦育ちの娘子達、院内嶽を越え行けば  
花咲き乱るる廣野原、鄙歌のどかに蕨狩り  
折しも桜花かざしつつ、さまよう一人の優乙女  
不思議に胸の燃え立ちて、心も身も焼く炎  
あなうれしくも湧く泉、うつる姿に花吹雪  
汲めど掬せど胸の火は、泉の水にも消やえらず

5

怪しやまたたくそのひまに、地は裂け岸は崩れたり  
見る見る變わるつかの間に、蛇身となりぬその姿

我と我が身に驚きて、我を怨しみ我に泣く  
遙かに叫ぶ友を見て、我が家の母に告げよかし  
親しき友よいざさらば、ゆく末長く幸あれと  
謂いも終わらず黒雲の、空一面に漲れば  
俄かに起こる雨や風、電雷轟きはためきて  
野原はうずみ山は飛び、逆巻く怒涛もの凄し

6

あな恐ろしのありさまや、昨日美し花野原  
今日は大波岸を嘔む、果てしも知らぬわだつ海の  
「ああ我が娘我が娘、母が来てしぞ龍子よ」と  
時しも激浪うずまきて、彼方の沖に浮かみしは  
落つる涙に霞めども、世に恐ろしき蛇身なり  
「否とよ娘世に在りし、優しき姿見せよかし」  
沈むと見ればこの度は、風凧波だに静まりて  
いと穏やかに春の海、露を含める海棠の

7

娘姿の色香にて、「母君ゆるし給われよ  
尊き聖の教えにも、有為伝變は世のならい  
うつり變わりは花の色、永くこの世に散らせじと  
妾に非望の願いあり、神は後生のいましめに  
吾が身を斯くも化し給う、現世の縁にし断ちぬれば

御手とることも荒波の、再び御目もじ叶うまじ  
老い先栄え給われ」と、あわれも深き水底に  
入りし人のありし日の、秘密の曲も涙なり

「作者不明」白百合

発行 松葉商店（桧木内村）

印刷 角館印刷所（角館町）

定価 金五銭

平成16年10月26日（十三夜・栗名月）

龍子に感謝を込めて龍子像の前でこの歌を初お披露目

